

韓国女性史の動向と展望
— 三国～朝鮮時代を中心にして —
「韓国文化研究」2015年

韓国学中央研究院 責任研究員
鄭海恩 (チョン・ヘウン)

I. 序論

韓国女性史の研究は、1990年代以後めざましい成長を遂げた。韓国女性史は韓国の歴史学の研究成果及び研究テーマの多様化の恩恵を被って一つの独自の研究分野として成長しつつある。ここに微示史(Micro history)や新文化史、日常史等の新たな歴史学の導入によって社会的に権力を持たない「些細な」人々に対する関心が台頭する中で、女性の歴史に光が当てられ関連資料も発掘、拡大する趨勢だ。

女性史は、1960年代末アメリカを闊歩した第二次女性解放運動の産物である。黒人人権運動、ベトナム反戦運動等、新左派運動が活発化する中で形式的には権利を獲得したにもかかわらず、依然として不平等な女性の地位に対する自覚が高まった。女性運動は、70年代中盤頃、学問的にも影響を及ぼして女性史は学問領域としての地位を獲得し、90年代まで好況を享受した。

女性史は歴史学に新たな問題を提起したり、新たなテーマを導入してそれまで顧みられることのなかった資料に改めて目を向けさせた。歴史学の根幹としての地位を獲得している概念や価値に対して疑いの眼差しを向ける中で既存の概念と価値を瓦解させたり検討させたりした。男性中心のエリート主義の歴史に挑戦しながら、歴史なしに存在するという事がどのような結果を生むかということについて熟考させたり、女性以外の少数者にも関心を持つようにさせた。
※1) このような面から、女性史は歴史学の最前線だと言える。

韓国における女性史の研究は、1927年李能和(イ・ヌンファ)の「朝鮮女俗考」から出発する。それから90余年が過ぎた現在、韓国の女性史は質的・量的に目覚ましい変化を起こしながら前進を続けている。可視的な成果を挙げると、

1994年に「韓国史市民講座」で、1996年には「歴史学報」で韓国女性史を特集で取り上げた。また、2004年には韓国女性史学会が結成されて現在まで学術誌「女性と歴史」を刊行している。今だに女性史を研究する学者は多くはないが、外面的成長とともに既存の観点や認識に有意義な質問を投げかける成果を上げている。

本稿は、前近代の韓国女性史を中心に、女性史研究の大きな流れを簡略に適示してみたものである。Ⅱ章で紹介する女性史に係る研究史で現在発表されている論文を土台にして女性史研究の流れを紹介することに重点を置いた。三国、高麗、朝鮮の女性史研究についての具体的な動向と成果は、紙面の関係で詳細に扱うことができなかつた。その代わりに、歴史学者の視角から現代、前近代の韓国女性史研究の到達点を把握することに力点を置いた。本稿を作成する上でⅡ章で紹介する女性史に係る研究史の現況論文に負うところが大きかつた。よって、本稿は筆者1人のものではない。しかし、本稿の至らない点についてはひとえに筆者の責任である。

※1) ゲルダ・レルネル著、カン・ジョンハ訳、「なぜ女性史か」、青い歴史、2006、275頁

Ⅱ. 女性史研究に係る研究史の現況

韓国で女性史に関心を持って研究を始めてから一世紀になろうとしている。その間韓国で進められてきた女性史研究の現況についての整理も根気強く成し遂げられてきた。とりわけ、前近代研究の動向についての研究史の整理が活発に行われている。

韓国で早い時期から韓国女性史研究の現況に対して関心を持っていた研究者は、朴容玉（パク・ヨンオク）だつた。彼女は、1976年に発表した「韓国女性史研究の動向」で、1958年6月に出版された「韓国女性文化論集」（梨花女子大）から約20年間の研究動向を整理した。おそらく韓国初の女性史研究の動向に関する整理であろう。

彼女は、当時、女性史研究の傾向が主に近代化過程に集中していると評価した。そして、女性史研究が活性化するために問題の発見や研究方法論が現歴史

学会の研究レベルに近づけるように努力しなければならないと提言した。

その後、女性史研究動向に関する整理が1990年代に再開された。韓国女性研究会女性史分課に所属したユ・ヘジョン、キム・ナムユン、権純馨（クオン・スンヒョン）、イ・スング、韓嬉淑（ハン・ヒスク）、鄭海恩（チョン・ヘウン）、ハン・ミギョン、チョン・ソンジュ、イ・スクインの共同研究の成果である「韓国女性史の研究動向と課題－前近代篇」は本格的なフェミニズムの視角から女性史研究を整理した意義ある労作である。

近代学問以後、1990年初めまで前近代韓国女性史を原始古代・中世1（高麗時代）・中世2（朝鮮時代）に分けて分野別に整理した。当時筆者もこの作業に参加したが、共同研究者が時代別に執筆を分担して研究成果を調査・分析した後、毎週集まって熱のこもった討論を繰り広げて完成した共同論文だった。イ・スング、ハン・ヒスクの「朝鮮時代女性史にかかる研究の現況と課題」は、前掲の論文のうち朝鮮時代をより精緻に整理、分析して発表したものである。

チェ・スッキョンは韓国女性史の成立を1927年の李能和の「朝鮮女俗考」から始まったと評価しつつ、1920年代から80年代以後まで時代及びテーマ別で研究史を検討した。そして、女性史研究の課題として、研究視角、研究方法論、資料の問題を提起した。

朴容玉『韓国女性史研究の動向』「梨花史学研究」9、梨花女子大梨花史学研究所、1976。

パク・ソンス、『女性史研究の里程標』、「月刊朝鮮」1981年3月号、朝鮮日報社。

勸告女性研究会 女性史分科、『韓国女性史の研究動向と課題－前近代篇』、「女性と社会」3、1992。

イ・スング、韓嬉淑、「朝鮮時代女性史に係る研究の現況と課題」、「韓国史学論集(上)」、水村パク・ヨンソク教授華甲記念論文集、1992。

チェ・スッキョン、『韓国女性史研究の成立と課題』、「韓国史市民講座」15、1994。

2000年代以後、最近まで何度も研究史の検討がなされた。韓嬉淑は朝鮮時代の女性史研究の動向とともに朝鮮時代の女性の有力者についての研究の現況まで試みた。これは、女性の有力者という単一のテーマの研究史を検討するほど女

性史研究の幅が拡大したことを立証してくれた。イ・スングは、「前近代女性史研究の現況と課題」で解放前後の時期から 2004 年までの研究成果を一目で全体が見渡せるように整理して課題を提示する成果を収めた。

一方、書誌学でも韓国女性史研究の傾向についての計量的分析がなされた。ユ・ソヨン、2003 年末まで発表された韓国女性史（古代～植民地時代）に関する論文、学位論文、図書 369 件を計量的に統計にして分析した結果、研究者が女性の地位に最も関心を示し、朝鮮時代の女性の研究が最も多かったという結果を発表した。

韓国女性史学会では 2007 年に『女性研究の現況と課題』、2013 年に『韓国女性史研究の現況と展望』なる特集を組んで女性史研究の成果を検討した。この際、前近代女性史研究の動向は、三国～高麗、朝鮮時代に分けて進行した。二度の研究史の検討を通じて、解放前後の時期から 2013 年まで前近代女性史研究の動向が体系的に整理された。韓国女性史研究学会の研究動向の整理作業は、女性史学会という名称にふさわしい、韓国女性史の活性化のための責任を遂行していると評価できる。

最近、韓国女性史研究会で韓国史に関する研究動向を整理しているが、2014 年に朝鮮時代の女性史研究の動向が掲載された。本稿の著者である鄭海恩は『朝鮮時代の女性史研究、どこに向かうのか？』で、朝鮮時代の研究動向とともに主要な争点を整理した。キム・ジョンウォンは、北アメリカで出版された成果を対象として 1970 年代から 200 年、2000 年以降に分けて女性史研究の動向を紹介した。同氏は、北アメリカで朝鮮女性史研究者は多くないが、消え去った女性の声を歴史の場へ引き出すという所期の成果を収めたと評価した。

韓嬉淑、『朝鮮時代女性史研究の最新動向（1991 年以後）』、「人文科学研究」

8、カトリック大 人文科学研究所、2003.

同上、『朝鮮時代の女性の容貌史研究の現況と課題』、「韓国容貌史研究」1、

2004.

ユ・ソヨン、『わが国の女性史研究の書誌的考察』、「韓国図書館・情報学会誌」

35(2)、韓国図書館・情報学会、2004.

イ・スング、『前近代女性史研究の現況と課題』、「韓国史研究 50 年」、慧眼、

2005.

カン・ヨンギョン、『韓国女性史研究の現況と課題』、「女性と歴史」6、韓国

- 女性史学会、2007.
- チャン・ビョンイン、『朝鮮時代の女性史研究の現況と課題』、「女性と歴史」6、2007.
- キム・ソンジュ、『女性と女性性研究の模索－三国時代から高麗時代までを背景に』、「女性と歴史」19、2013.
- 鄭海恩、『朝鮮時代の女性史研究の動向と展望、2007～2013』、「女性と歴史」19、2013.
- 同上、「朝鮮時代の女性史研究、どこに向かっているのか?」、「歴史と現実」91、2014.
- キム・ジョンウォン、「北アメリカでの朝鮮時代の女性史研究の動向」、「歴史と現実」91、2014.

以上が1976年から2014年までの前近代女性史研究に係る論文である。韓国における女性史研究の歴史が浅いにもかかわらず、研究史の検討が着実に成し遂げられていることを確認することができる。このような傾向は女性史の研究者が歴史学界に女性史に対する関心と重要性を注意喚起しながら、内部的には女性史についての反省と跳躍をするために試みられたと思われる。惜しむらくは、三国及び高麗時代の女性史研究が多少低調なため、朝鮮時代の女性史の研究が大きな比重を占めている点である

Ⅲ. 女性史研究の流れ

1. 植民地時代以後の女性史研究の流れ

韓国における女性史研究の始まりは我々が考えるよりずっと長い伝統を持つ。1920年代後半李能和（イ・ヌンファ、1869～1943）は、宣教師アレンが書いた「五洲女俗通考」に、朝鮮の女性について『幼子が泣くと猫が来るとあやす』という内容すら出てくる現実に衝撃を受ける。そこで、『朝鮮女俗史がないのは我が朝鮮の過ちだ。』という反省から「朝鮮女俗考」（1927）を発行した。そして、同年、妓生の歴史をまとめた「朝鮮解語花史」（1927）も発表した。

日本の統治時代に朝鮮総督府と日本人の学者は、植民地の統治資料を確保す

べく朝鮮の風俗と民俗を調査した。その調査結果に基づいて『朝鮮慣習調査報告書』、(1910・1912・1913)、『李朝の財産相続法』(1936)、『李朝実録風俗関係資料撮要』、(1938)、『朝鮮舊慣調査事業概要』(1938)、『朝鮮祭祀相続法論序説』(1939)、「李朝各種文献風俗資料撮要」(1944)等が作成された。この資料は慣習と風俗というテーマで家族について様々な資料を集めたが、この中に資料の形態ではあるが、朝鮮の女性の姿を見つけ出すことができる。

日本の統治時代で注目すべき成果は、崔南善(チェ・ナムソン)が1943年に発行した「故事通」(全4篇100頁)である。同氏は第3篇89頁『婦人生活』で、夫婦・教養・女工に分けて朝鮮時代の女性の生活を幅広く取り上げた。彼は、女性が制度の抑圧下においても聡明さを発揮したと見つつ、女工篇で沿海や島嶼地域の女性の労働を高く評価して注目している。※2)

しかし、解放後、女性史に対する関心は高くなかった。このような状況で女性史の空白を埋める重要な研究が家族史で成し遂げられた。孫晋泰(ソン・ジンテ)は、「韓国民族史概論」で『女性の地位』(第8章 第4節 社会2)において、古代社会の女性の高い地位を取り上げた。金斗憲(キム・ドゥホン)は、植民地時代の資料の調査と研究成果を吸収して「朝鮮家族制度の研究」(1949)を発行した。この研究は韓国家族史研究の扉を開けた先駆的な業績であり、韓国の家族の史的発展に関心を寄せていた。一方、「女流」という名称で朝鮮時代の女性の詩文集を集めた「朝鮮歴代女流文集」(閔丙燾(ミン・ビョンド)編纂、1950)も出版された。解放後初の女性に関する資料集であったが、当時は大きな反響を呼ぶことができなかった。

その後、女性が歴史学の場で本格的に論議されるまではある程度の時間が必要だった。1960年から70年代は4・19革命、70年代の家族法改正運動、75年の国際婦人年宣言等、家族に対する関心や社会史研究の活性化と相まって女性に対する関心が高まった。この時期淑明女子大学校ではアジア女性研究所(1960)を設置して「アジア女性研究」なる学術誌を発刊した。梨花女子大学校でも1960年代後半に韓国女性史研究室ができて韓国女性研究所(1977)が発足した。

これに力を得て、70年代の女性史研究の里程標とも言うべき著書が2冊出た。「韓国女性史」(全3巻))(梨花女子大、1972)と「李朝女性史」(朴容玉、1975)がそのヒロインである。

このうち、「韓国女性史」は金活蘭(キム・ファルラン)博士の業績を記念して編纂した女性通史である。前近代的は第1部高麗以前、第2部朝鮮時代で構

※ 2) 朴容玉、『韓国の女性史研究の動向』、『梨花史学研究』9、1976、33頁。

成されている。1部は崔淑卿（チェ・スッキョン）、2部は河炫綱（ハ・ヒョンガン）が執筆した。

崔淑卿は前史時代における女性、部族社会における女性、古代社会の女性、高麗時代の女性に分けて執筆した。河炫綱も政治・経済・生活・特殊職女性・文化・文化を網羅するとともに、4期に女性史を時代区分することも試みた。開放以後、最初の女性通史として現在まで引用されている。

「李朝女性史」は朝鮮時代の女性の地位と役割を究明する際の著者の問題意識をはっきりと表した著書として、『女性＝抑圧』という視角を脱け出して朝鮮時代の女性の主体性を積極的に解析した。

これ以外にも淑明女子大のアジア女性問題研究所が朝鮮時代の女性に関する論文10篇を編んだ「李朝女性研究」（1976）、韓国女性教育史を体系的にまとめた「韓国女性教育史」（孫仁銖（ソン・インス）、1977）も紹介すべき価値のある書籍である。また、資料集として「韓国女性関係資料集」（全11冊）（梨花女子大、1977）が出版されて、これまで収集、発掘した女性に関する資料を総合的に把握できるようになった。

1980年代の民主化運動が高揚するにつれて女性運動と女性学が成長し、民衆史も出現する中で女性史にも有意義な研究成果が発表された。姜英卿（カン・ヨンギョン）の『韓国古代社会の女性－三国時代の女性の社会活動とその地位を中心にして』（「淑大史論」10・11、1982）、李效再（イ・ヒョジュ）の『韓国の女性労働序説』（「女性学論集」2、1985）が注目すべき研究成果である。さらに、女性史を直接標榜しなかったが、盧明鎬（ノ・ミョンホ）の高麗時代の親族制についての研究も意味のある成果だと言える。同氏は高麗の家族形態が両側の制度であり戸主の姉妹や妻の両親、戸主の婿等が同居する非父系的な形態であったことを強調した（「高麗時代の両側の親族組織研究」、ソウル大博士学位論文、1988）。

1990年代以後韓国歴史学の傾向は、多元化として特徴づけることができる。70～80年代イデオロギーと民主主義の闘争で点綴した時代が幕を下ろして違う時代が訪れた。韓国の西洋史の研究者がインドのサバルタン研究、ドイツの日常史、イタリアのミクロストリア、アメリカの新文化史などの歴史理論を紹

介したのもこの時である。これに直接影響を受けたと言えるものの、社会史に対する関心とあいまって女性史研究も量的に拡大しながら飛躍した。

驚くべき出来事は、1994年に「韓国史市民講座」15集、1996年に「歴史学報」第150集で女性史を扱ったことである。この二つの学術誌で女性史特集をどのような内容で企画したのかも重要であるが、韓国史学界で女性史の特集を組んだということ自体が画期的な事件だと言える。それだけ女性史に対する学界の関心が高まっていることを反映した現象だと言える。

とりわけ、1990年代中盤以後、韓国の女性史学の地形図が大きく変わる中で女性史研究は活気を呈した。ソビエトの崩壊でマルクス主義理論が退潮するとともに女性学にも大きな変化が起きた。代表的な現象がミクロストリア、日常史、新文化史に対する熱い関心である。歴史研究の対象がマクロ的な観点からの政治史、社会史から人間個人のささやかな生活へと移っていく中で、それまで注目していなかった女性に対しても関心を示すようになったのである。政治史や社会史では存在感のない女性が日常で主体として登場することによって女性史は歴史の辺境から徐々に内部に侵入しつつある。

この時代、前近代女性史に関する著書も増加し始めた。韓国女性史通史として「我々女性の歴史」(韓国女性史研究所 女性史研究室、1999)、「我が国の女性はどのように生きて来たか」(李培鎔(イ・ベヨン)外、1999)も出版された。また、韓国史ではないが、ジョルジュ・デュビー、ミシェル・ペローが監修し、研究者68名が参加した「女の歴史3・4」(全4巻、新しい波、1998-1999)の出版は女性史の多様なテーマと方法論から国内の学者の大きな反響を呼んだ。

最後に前近代韓国女性史研究で注目すべき現象は、女性史をテーマとした博士論文が輩出されたということである。女性史に係る博士論文として三国時代は『新羅伝統信仰の政治・社会的機能研究』(姜英卿)、『墓祭を通じて見た新羅の親族研究』(キム・ソングジュ、2002)、『新羅の王室女性の呼称変遷研究』(イ・ヒョンジュ、2013)が代表的である。

高麗時代は『高麗妓生の風俗と文学の研究』(李慶福(イ・ギョンボク)、1985)、『高麗王室属内婚研究』(鄭容淑(チョン・ヨンスク)、1987)、『高麗時代の婚姻制度研究』(權純馨、1997)、『高麗時代の庶子とその子孫の研究』(イ・ジョンラン、2003)が挙げられる。

朝鮮時代女性史に係る博士学位論文は『朝鮮時代の旌表政策に関する研究』(パク・ジュ、1988)、『朝鮮初期の婚姻制度研究』(チャン・ビョンイン、1993)、

『朝鮮初期の宗法の受容と女性の地位の変化』(イ・スング、1995)、『朝鮮後期の女性戸主の研究：慶尚道丹城縣戸籍大帳の分析を中心にして』(チョン・ジョン、2001)、『17世紀前後の両班家の妻の経済生活研究』(ハン・ヒョジョン、2007)、『17世紀の垂簾聴政研究』(イム・ヘリョン)、『朝鮮時代の後宮研究』(イ・ミソン、2012) 等がある。

この他に朝鮮時代の家族をテーマにした博士学位論文として『朝鮮前期の財産相続』(文叔子(ムン・スクチャ)、2000)、『朝鮮前期の収養/侍養の実態と養子縁組法の定着』(パク・ギョン、2007) も注目すべきである。また、歴史学ではないが、『朝鮮朝の女性祭文研究』(柳敬淑(ユ・ギョンスク)、1996)、『朝鮮時代の女訓書に表れた女性のアイデンティティ研究』(キム・オンスン、2005)、『朝鮮後期の女性知識人の主体認識の様相』(金順天(キム・スンチョン)、2010)、『朝鮮王室の出産文化研究：歴史人類学的接近』(キム・ジョン、2010) 等も朝鮮時代の女性史の外延を広げてくれる学位論文である。